

◆ ドヴォルザーク／ノットウルノ ロ長調

ドヴォルザークという作曲家は？

「新世界」を作曲した人。チェコの作曲家。肉屋の資格をもっていた大音楽家。ブラームスと仲が良かった人。教え子姉妹のお姉さんに恋をし、妹と結婚した人…などなどみなさまいろいろとイメージをお持ちだと思いますが、私が思うに一言で言うと偉大なるメロディーメーカーかと。しかも、なぜかチェコの地から遠く離れた日本人の心に染み入る旋律を多く残しています。

さて、今回の曲、ノットウルノも偉大なるメロディーメーカー・ドヴォルザークが残してくれた名曲の一つです（作曲は 1875 年、ドヴォルザーク 34 歳）。この旋律は、弦楽四重奏曲第 4 番や弦楽五重奏曲（ト長調）でも用いられており、作曲家自身もお気に入りのメロディーだったのではないのでしょうか？

冒頭、低弦により 4 小節間序奏が奏でられ、続いてコントラバスのピッツィカートに誘発されるようにヴァイオリンによる静かな美しい旋律が始まる。旋律は、中声部の 8 分音符進行の流れの中で、時にはワグナーを彷彿させるターンを汲み入れながら続いていく。その後、中声部の 8 分音符進行の変則形に暗示を受けるような形で旋律は静から動へと変化する。動の旋律は幾度となく緩急の波をかいぐりながら終息へと向かい、最後は低弦のピッツィカートに続くヴァイオリン・ヴィオラの和声とともに静寂を迎える。

ブルーメンがこの最初の曲でどのような演奏会の雰囲気を作り上げるかも楽しみなところである。

※ notturno = nocturne（ノクターン、夜想曲）

(Y. S.)

◆ ドヴォルザーク／交響詩「水の精」

「新世界交響曲」などの名作を生んだアメリカ生活を終え、ボヘミアに帰国したドヴォルザークは、1896年（54～55歳）、母国の詩人エルベン（K. J. Elben）の民話詩集による4つの交響詩（「水の精」、「真昼の魔女」、「金の紡ぎ車」、「野鳩」）を作曲した。

ブラームスと親交が深く、交響曲などの絶対音楽で名声を上げていたドヴォルザークが、何故晩年になって標題性のある交響詩を手がけたのか。もしかしたら、同時代のリヒャルト・シュトラウスの交響詩（1895年「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」、1896年「ツァラトゥストラはかく語りき」など）の影響もあったのかもしれない。

4曲の交響詩はいずれも、エルベンの原詩の物語に忠実に、ドラマティックに作られている。原詩のあらすじだけでも知っていると、この「水の精」もずっと面白く聴けるだろう。

曲は、大まかに言うと A B A C A B A という構成を取っており、A は水の精（ヴォドニーク）、B は娘と母、C は湖の底の場面を描写している。

A：ヴォドニークのテーマはフルートで可愛らしく始まるが、次第に音量を増し、ついにはグロテスクな本性をあらわす。明日嫁を迎えるのだというヴォドニーク。

B：クラリネットの明るく素朴な娘のテーマと弦楽器の哀愁を帯びた母のテーマの対話。湖にスカーフを洗いに行くという娘と、不吉な夢を見たからと引き留める母。

A：再びヴォドニークのテーマ。母の制止を振り切って湖に来た娘は、ヴォドニークの罠にはまり、乗っていた小橋が崩れて湖に沈んでしまう。

C：ヴィオラとクラリネットが、湖の底で悲しみに嘆く娘の姿を描く。ヴァイオリンに引き継がれ感情の高まりを見せる。やがてフルート、オーボエとコーラルングレによる子守歌。娘の慰めは、ヴォドニークとの間に生まれた赤子だけ。

A：妻の歌に怒るヴォドニーク。母に会わせてと哀願する娘。両者の葛藤の後、ついにヴォドニークは許しを与える。夕べの鐘までに戻ろう、赤子は預かることを条件に。

B：トロンボーンとチューバの伴奏を伴い、チェロが娘のテーマを、木管のソロが縮小された母のテーマを歌い交わす。短くも懐かしく、離れがたい再会。

A：夕闇とともにヴォドニークが迫る。夕べの鐘（木管）が鳴り終わると、扉を激しくノックする音（バスドラム、低弦）。娘を返せと要求するヴォドニークと必死に拒む母。ヴォドニークの怒りは頂点に達する（金管）。そして…

< 何かが落ちた…扉の下に／液体が流れる…血だらけの；／老母が扉を開けると／誰もが驚きで言葉を失う！ >

< 二つの物体が血海の中に／恐ろしさで全身に悪寒が走る；／胴体のない赤子の頭と／頭のない小さな体 > ※

コーラルングレとバスクラリネット、そしてオーボエが悲嘆の声を上げ、曲は陰惨な結末を迎える。

※ K. J. エルベン「水の精（ヴォドニーク）」（関根 日出男／訳）より

(T. T.)

◆ ブラームス／交響曲第 2 番 ニ長調

「ブラームスはお好きですか？」現代の日本で、こんな台詞でデートに誘い上手く OK を貰える可能性がどれほどあるのかわかりません。が、本日ご来場くださった皆さんに「ブラームスはお好きですか？」と尋ねれば、何かしらのお返事をいただけるのではないかと思います。

本日の演奏会。最後に演奏される曲目はヨハネス・ブラームス作曲の交響曲第 2 番ニ長調作品 73。アマチュアオーケストラで（そしてプロオケでも？）通称「ブラ 2」と呼ばれるこの曲名に対して、皆さんは何を思われるのでしょうか。馴染みの曲？大好きな曲？もう飽きた？ブラームスの曲はほとんど知らない？皆さんそれぞれの答えをお持ちかと思えます。私にとってこの「ブラ 2」は、オーケストラでの演奏活動を深めるきっかけとなった思い出深い曲の一つです。

今から 10 年余り前。想定外の進学となった結果、突如実家を離れ、見知らぬ土地で一人暮らしを始めました。当然周囲に知り合いや友人は少なく、特にやることも無く月日が過ぎていたそんなある日、キャンパスの外の道を歩いていて偶然聞こえた音をたどってオーケストラの部室にたどり着きました。ちょっと部屋を覗いてみただけにも関わらず入団希望者と勘違いをされ、楽器経験を尋ねられて「音楽の時間にちょっと触ったことがある程度」と答えてだけでその楽器を希望パートにされ、特に断る理由も無

いというだけで入団することとなりました。

とはいえ、「ちょっと触ったことがある程度」ですから、全体の練習に参加は出来ません。ひとり基礎練習をする一方、よく分からないまま毎週オーケストラの練習を見て、様々な楽器の Solo や Tutti を何度も聴いているうちに、練習されている曲が「ブラ 2」ということを知り、鼻歌で歌っているうちに「いつかこの曲をオケで弾いてやろう」と考えるようになりました。演奏会が終わり、オケが違う曲の練習を始め、自分も他の曲で練習に参加するようになった後も、個人練習の中で密かに「ブラ 2」を練習した思い出があります。

「ブラ 2」との出会いは、なんとなく始めた演奏活動に短期的な目的を与えてくれました。結局演奏する機会を得るのには 10 年の月日を要しましたが、私にとって「ブラ 2」は大事な曲の一つとなっており、この曲を聴くと 10 年余り前の様々なことを、ふと思い出します。

さて、私の個人的な思い出話になってしまいました。曲のご紹介も少しばかりさせていただきます。

作曲は 1877 年の夏ごろ。オーストリアのペルチャッハという避暑地で書かれました。ベートーヴェンの交響曲を意識するあまり、着想から約 20 年の月日をかけ 1876 年に作曲された第 1 番とは対照的に、この第 2 番は約 4 ヶ月で作曲されたといわれています。曲想は極めて穏やかで明るい箇所が多く、荘厳な第 1 番とは正反対に近いものがあります。冒頭の低弦によって演奏される「D-C#-D」が全曲を通してのテーマであり、一楽章の中だけに限らず四楽章の冒頭やその他何度も形を変えて出てきます。

様々な背景をお持ちの皆さんにとって、本日演奏される「ブラ 2」が今までどおりのイメージであっても、何か違うものであっても構いません。ただ、何か心に感じるものを持って帰っていただければ幸いです。

(A. T.)